翡翠の勾玉の不思議

大友一夫

◆おおとも・かずお．医師．大友内科医院院長．埼玉県秩父市．

この春，津軽地方の花見を兼ねて，三内丸山遺跡の翡翠の大珠（だいしゅ）に会いに行った（**写真**）。透明感のある深い翠（みどり）の円盤状の翡翠は美しく磨かれ，その真ん中にはきれいな穴が開いている。翡翠のモース硬度は6.5～7。ダイヤモンドには敵わないが，ダイヤモンドより衝撃には強いと言われている。三内丸山遺跡は縄文時代中期中頃から中期末葉（約5900年前～4200年前）の大規模集落であり，ここでは砥石も漆器も見つかっている。鉄器もない紀元前30世紀にどうやってこの硬い石を採石し，砕き，その光沢を出し，穴を開けることが出来たのか，その技術に驚くほかないのである。

恐らく古代は，よく乾燥した篠竹の棒の先端に，硬い石の粉末を塗り付け，これで弓錐や舞錐という火起こしの技で，穴を穿ったのではないかと推定されている。とてつもない労力と時間を要する。簡単に細工のできる装飾品とは違い，美しい光沢のある翡翠となれば，貴重な宝石でもあったはずで，おそらく権威の象徴として高貴な人が身につけていたに違いない。

三内丸山遺跡には翡翠の勾玉は発見されていない。この勾玉は縄文時代後期に登場し（北海道カリンバ遺跡でも出土している），弥生時代が最盛期だった。勾玉の内に湾曲した曲線を磨くのには大珠よりも工夫が要る。勾玉は大珠の進化したものと見なせるのである。『魏志倭人伝』によれば，倭の女王が「白珠五千，孔青大句珠二枚」などを魏に貢いだことが記されている。白珠とは真珠，孔青大句珠（句とは勾に同じ）とは大きな翠の翡翠の勾玉を指している。わずか二枚でも貴重な献上品であったことが伺われる。

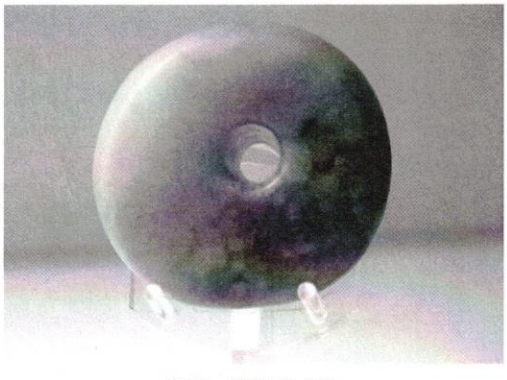

写真　翡翠の大珠

大珠や勾玉の材料である翡翠が，糸魚川周辺で採石された国産のものであると確認されたのは戦後になってからである（2016年に日本鉱物学会が，翡翠を国石と認定している）。翡翠の勾玉はほぼ日本全国の遺跡から発見されており，縄文時代にはすでに海路を含めた交通が行き渡っていた証左でもある。また高価な勾玉や漆器を作る職人がいたということは，高貴な支配者のもとで分業態勢が敷かれていたことを示している。

問題は勾玉の形の由来である。自然界で似たものと言えば，カシューナッツが挙げられるが，これは南米のものであるので当たらない。これまで考えられたこととして①獣の牙，サメの歯②幼魚③太陽と月の合体④人魂⑤胎児⑥破損した耳飾りの再利用⑦巴⑧ヲシテ文字などが挙げられるが定説はない。小林秀雄は晩年勾玉に興味を示したが，勾玉の形は日本人あるいは人類が初めて命の形を作ろうとしたときに，直覚したものであろうと類推している。その中でも最も美しい形があったはずであると。

今回わたしは古伝『秀真伝』に載るヲシテ文字（ホツマ文字）との関連で勾玉の形を考えてみた。『秀真伝』序文の冒頭に「天地（あめつち）の　開（ひら）けしときに　両神（ふたかみ）の　瓊矛（とほこ）に治（おさ）む　民（たみ）増して　天照神（あまてるかみ）の　御鏡（みかがみ）お　足して三種（みくさ）の　御宝（みたから）お　授（さず）く御孫（みまご）の」とある。伊奘諾尊・伊奘冉尊両神の前の天神（あまかみ）である面足尊（おもたるのみこと）が，両神に二種の神器である瓊（と）と矛を授けて皇位継承を行った。天照大神はこれに鏡を加えて三種の神器とし，これを孫の瓊々杵尊（ににきねのみこと）に授けたというのである。『日本書紀』では瓊矛を「ぬほこ」と読み，「瓊は玉なり。此（ここ）には努（ぬ）と云ふ」と解説している。一方『古事記』では「沼矛（ぬぼこ）」と表現し，玉で飾った矛と解釈している。矛は面足尊が作ったものなので，それ以前の神々は瓊を授けて皇位継承していたと思われる。この瓊こそ，八坂瓊（やさかに）の

勾玉のことである。越後国風土記に「八坂丹は玉の名なり。玉の色青きを謂ふ」とあるように八坂瓊とは大きな翠色の美しい宝石を意味している。現在八坂瓊の勾玉は皇居の「剣璽の間」に保管されているが，天皇陛下も見たことがないのである。

『秀真伝』では「瓊は璽」と表記されている。璽とは印のことで，御璽といえば天皇の印章を指している。『秀真伝』はヲシテ文字で綴られており，天を表す「ア」の文字は，丸の真ん中に点があり，地を表す「ワ」は，菱形の真ん中に点がある。またアの変体文字は，左巻きの渦巻きであったり，左一つ巴紋のような形をし，ワの変体文字は右巻きの渦巻きであったり，右一つ巴紋の形をしている。三内丸山遺跡で見た穴の空いた大珠はアの字そのものであり，勾玉はその変体文字とも受け取れるのである（図）。いずれ天を表している。

皆が翡翠の勾玉に魅せられるのは，ただ単に美しいだけでなく，無意識のうちに天と感応し，パワーを感得しているためなのかも知れない。

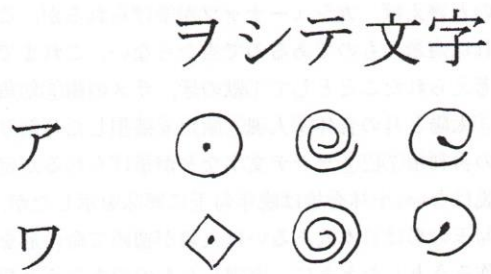

図　ヲシテ文字